

無業者の中で、問 44（無職就労意識）に対して「希望と違う仕事であっても、働きたい」ないし「希望の仕事があれば働きたい」と答えた者を「非求職型」とした。そしてこれら「求職型」・「非求職型」以外の無業者を「非希望型」とした。

このような手続きで分類した結果、無業者 157 名中、「求職型」は 67 名(42.7%)、「非求職型」は 58 名(36.9%)、「非希望型」は 32 名(20.4%)となった。本報告書第 2 部の就業構造基本調査の再集計結果では、上記各類型の比率は順に約 60%、20%、20%となっている。この再集計結果と比較して、今回分析に用いる「自立調査」の無業者サンプルでは、「求職型」が 15 ポイント程度少なく、「非求職型」が 15 ポイント程度多くなっている。このような相違が生じる理由は、就業構造基本調査の集計においては 15～34 歳の年齢層を対象としていたのに対し、「自立調査」では年齢の上限を 30 歳としており、前者には含まれているが後者には含まれていない 30 歳代前半の年齢層に「求職型」が多いことによると考えられる。なお「非希望型」の比率は両調査でほぼ一致している。

次節以降では、これら 3 つのタイプの家庭背景や教育経験・職業経験、現在のあり方などを細かく検討していくことにする。全体で 157 名にすぎない無業者サンプルをタイプ別・性別に分割すると各グループのサンプル数はさらに少なくなるため、その中で比率（%）を算出することには問題があるが、以下の分析ではあくまでひとつの目安という意味で比率を付記することにする。

第 2 節 タイプ別の基本属性

本節では、各タイプの最も基本的な属性として、性別と年齢の分布を検討する。

1 性別構成

各タイプの性別構成を見ると、「求職型」は男性 37 名（55.2%）、女性 30 名（44.8%）、「非求職型」は男性 28 名（48.3%）、女性 30 名（51.7%）、「非希望型」は男性 17 名（53.1%）、女性 15 名（46.9%）となっている。「求職型」で男性の割合がやや多いが、総じていずれのタイプでも男女比はほぼ拮抗している。

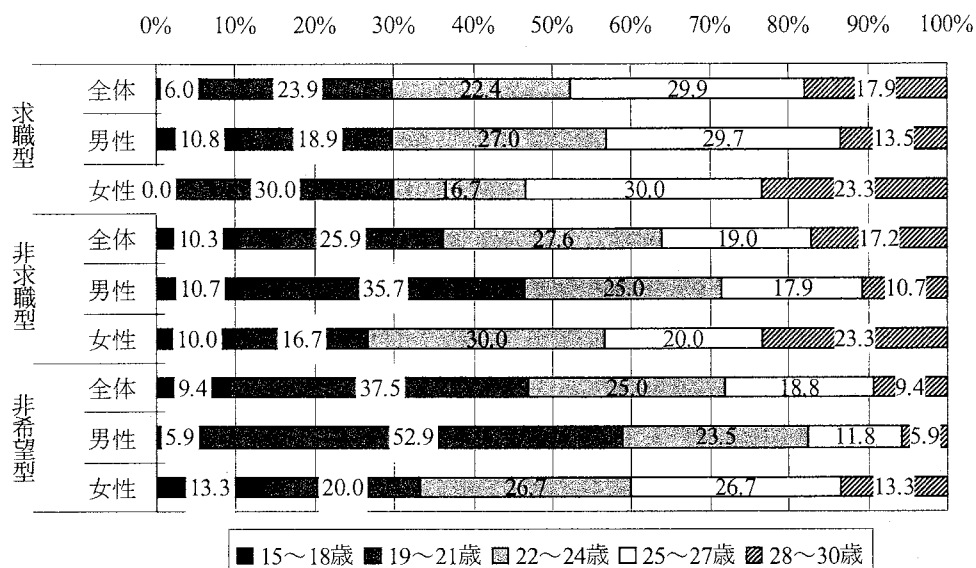
2 年齢構成

続いてタイプ別・性別の年齢構成を図 3-1-1 に示した。21 歳以下の低年齢者の比率は「非希望型」46.9%＞「非求職型」36.2%＞「求職型」29.9%の順に多い。逆に 25 歳以上の高年齢者の比率は、「求職型」47.8%＞「非求職型」36.2%＞「非希望型」28.2%となっている。ここから、比較的高い年齢の者が多い「求職型」、若い年齢の者が多い「非希望型」という特徴が読み取れる。

各タイプの中で性別の年齢分布を見ると、いずれのタイプでも男性より女性の方が 25 歳以上の高年齢者の比率が高い。特に「求職型」女性は、53.3%と過半数が 25 歳以上である。対照的に、「非希望型」男性は 21 歳以下の低年齢者が 58.8%に達している。このことは、女性の場合はある程度高い年齢でも無業となりやすいのに対し、男性では年齢が高くなれば無業でなくなる確率が女性よ

りも相対的に高いことを意味している。その結果、男性で就業に対して極めて消極的な「非希望型」がかなり若い層に集中する結果になっていると考えられる。

図3-1-1 タイプ別・性別 年齢構成



第3節 タイプ別の家庭背景

本節では、無業者の家庭背景として、両親との離死別状況、現在の世帯構成及び暮らし向き、そして家庭外との接点の度合いとして外出頻度を、それぞれタイプ別に検討する。

1 各タイプの両親状況

表3-1-1は、両親の状況をタイプ別に示したものである。「両親ともいる」比率は「求職型」83.6%、「非求職型」77.6%、「非希望型」71.9%で、調査対象サンプル全体の88.4%と比べて「非求職型」及び「非希望型」では両親が健在である者の比率が10ポイントないしそれ以上低くなっている。特に「非希望型」女子は両親が健在である比率は60.0%と低く、父母との離死別経験者が40.0%を占めている。「非求職型」では父離別、「非希望型」では父死別の比率が高い。